

江戸派の終焉

— 徳川時代後期歌人井上文雄の学統意識 —

鈴木 亮

(近世) 後期では、自己らしい作品を得ようとする文芸的要求から、その自由を流派を超越して各派の流れ合ひに求めることを当然のこととした。師承にこだはずに自己の信ずる説に就き、あるいは旅に求めて先学を訪ひ、その専攻の面での教示を受けるなどと、道のための自由な空気は、国学和歌の發達を

うながす原動力となった。そのためには必要な著書に就いて自力で研究することが盛になったから、辺境に学が興り、茅居に作歌をつとめて大成する人も多かつた。流派にこだはって対立をつづけてゐた既成歌壇的な動きよりは強くて心強いものを見るのである。

と、稲葉文庫(東洋大学附属図書館所蔵)の旧蔵者として知られる国文学者、山本嘉将氏が説くやうに、徳川時代も後期を迎へると、それまでの賀茂真淵門下の加藤千蔭、村田春海に代表される江戸派、本居宣長門の鈴屋派、香川景樹門の桂園派といった各派に於る対立は一応の落ち着きを見せて来た。『鴨川集』『鯁玉集』をはじめとす

る類題和歌集の盛行もあり、地方の歌人と江戸京都大坂といった大都市圏の歌人との交流も頻繁に行はれ、地域、階層を問はず和歌の担ひ手が拡大して来たのも、この頃のことである。本稿では、斯様な徳川時代後期を生きた井上文雄といふ江戸派歌人の学統意識に着目することによつて、当時の歌人が如何に自由な態度で学問をしてゐたか、そして歌を詠んでゐたかを考へてみたいと思ふ。

徳川時代の学者の学問観、或いは師匠に対する思ひといふものは、その初期に於ては、松永貞徳『戴恩記』(天和三年刊)の「物習ふ人は道の冥加を思ふべき事なり。一字の師匠なりとも芳恩謝徳の心ざしをつねに持つべし。」²⁾が有名であらう。『戴恩記』は、貞徳が自らの師恩を尊びつゝ、生涯を回顧した歌学書である。道の冥加とは、その道を学んでゐるうち、知らぬ間に受けてゐる利益のこと。一字の誤読や誤写を正してくれた恩人には、常に感謝の気持ちを持ってと言ふことである。古今伝授による歌学の継承が慣習とされてゐたこの時代、師を敬重する態度は極めて自然なものであつたのであらうが、時代も下り、それから百年後、徳川時代も中期後期に到ると、本居宣長の「師の説になづまざる事」(『玉勝間』)のやうな自由な

学問観が表れて来ることとなる。宣長は、

おのれ古典イソヘキをとくに、師の説とたがへること多く、師の説のわるき事あるをば、わきまへいふこともおほかるを、いとあるまじきことと思ふ人おほかんめれど、これすなはちわが師の心にて、つねにをしへられしは、後によき考への出来たらんには、かならずしも師の説にたがふとて、なほかりそとむ、教へられし、こはいとたふときをしへにて、わが師の、よにすぐれ給へる一つ也、⁽³⁾

と綴る。古典を解釈するに縦令自らの説と師の説とが違つたとしても、必ずしも師の説に固執することはない、正しい説を追究する態度が必要だ、と「わが師」賀茂真淵から教はつたといふことである。『玉勝間』は、時代を超えて板本活字本と広く流布し、多くの読者を獲得した。後世に及ぼした影響は尠からぬものがあらう。

二

こたび取り上げる、徳川時代後期の国学者歌人井上文雄であるが、略伝を示せば以下の如くである。

文雄 ふみを（江戸時代後期歌人）井上。通称は元真（代々襲名）。柯堂、歌堂と号す。寛政一二1800年、明治四1871年一月一八日、七二歳。父祖より田安家の侍医。若くして和歌を好み、岸本由豆流、一柳千古に国学和歌を学ぶ。伊勢津藩主藤堂高猷、徳島藩主蜂須賀齊裕に歌文を教授するなど、幕末期江戸歌壇を代表する歌人の一人であった。その詠風の特徴とし

ては、王朝の趣味、田園への憧憬、洒落滑稽、時勢への諷刺という四点が挙げられる。慶応四一1868年門人草野御牧と明治新政府批判の『諷歌新聞』を発刊し、札問局に拘禁された、気概の人でもある。門人に佐々木弘綱、大野定子、松の門三紳子、横山由清など。家集『調鶴集』、註釈書『冠註大和物語』、撰集『摘英集』、歌学書『伊勢の家づと』、歌集『老のくりごと』、歌学書『道のさきはひ』、撰集『さきはひ草』など。

斯様に文雄は、村田春海の門人岸本由豆流、加藤千蔭の門人一柳千古に師事したがゆゑ、賀茂真淵の江戸での門下千蔭、春海の兩名を祖とする江戸派の系譜に連なる国学者歌人と言ひ得るのである。佐佐木信綱も、文雄に就て「はじめ織錦齋門の考證学者岸本由豆流に学び、後、一柳千古に就いて一家をなし、江戸派の殿将として幕末の歌壇に光を放つた」と指摘してゐる。⁽⁵⁾

三

文化文政期に到ると、宣長（享和元年歿）、千蔭（文化五年歿）、春海（文化八年歿）といった真淵直門の歌人は世を去り、その門人第二世代ともいふべき国学者歌人が擡頭して来た。文政元年（文化十五年）は、賀茂真淵の五十年忌にあたる年であり、十月二十九日その学統に連なる江戸の国学者たち、小山田与清（春海門）はじめ清水浜臣（春海門）、一柳千古（千蔭門）等は、「賀茂翁の五十回忌の会」に参加するために真淵の墓のある品川東海寺の少林院に集まり、歌会を催し古人を偲んだ。翌月与清は、真淵の伝記『賀茂真淵

翁家伝』を纏め、出版する。これに刺戟を受けた僧立綱は、国学の始祖を契沖に見て、真淵、宣長と続く三哲観を示さんと『三哲小伝』を刊行する(文政元年序刊)。「三哲小伝」は、立綱が契沖の伝記を書き、斎藤彦麻呂が宣長の伝をもものし、先の与清の真淵伝とを併せて一書としたものである。これ以降、国学者歌人の間には学統意識が芽生えて来、自らの学問の淵源を確かめるべく、次に掲げるが如く学統に関する著述が数多出版されることとなる。⁶⁾

木下幸文著「四大人の論」『亮々草紙』文政四年刊

立綱著・江澤講修増補『三哲小伝』天保二年刊

萬葉堂主人著『古学道統図』安政初年刊

大國隆正著『学統弁論』安政二年成

平田篤胤著『玉だすき 九之巻』安政三年刊

間宮永好著『古学道統図』安政五年刊

中川長延著『近世歌人略系』安政七年刊

桂園派歌人木下幸文は、契沖・春満・真淵・宣長四人の国学者を「四大人」として挙げ(これが四大人観の嚆矢とされる)、篤胤は『玉だすき』に於て、契沖を退け、春満・真淵・宣長の三人を重要視するといふ見方を示し、篤胤門下の大國隆正はこれに篤胤を加へて「四大人」といふ国学観を弘めた。

安政初年に刊行された『古学道統図』は国学者の学統を記した系図の中で最初のものであり、小山田与清門下にして水戸藩士である国学者間宮永好もまた、同名の著述を残してゐる。安政期に到ると類題和歌集が陸続と刊行されたことにより、地方の歌人と三都の歌

人との繋がりが深くなり、全国的に国学者歌人が輩出し、彼らはその師承関係を紐解き、自らの学統を確かめることに関心を寄せるやうになつた。

与清は、自らの日記『擁書樓日記』(文化十三年十二月晦日条)に「織錦門人の分脈」として真淵以下、江戸派の国学者歌人の系譜を記してゐるが、かうした学統を強く意識し、自分こそが師の学問の継承者であるといふ意識のあらはれは、江戸派の歌人に特に顕著であり、田中康二氏は出版を手掛かりに以下のやうに指摘してゐる。⁷⁾

江戸派の出版活動には重要な点が二つ存在する。一つ目は学派を顕彰することが、それにつながる自分の立場を強化することになるといふことである。千蔭・春海における『万葉集略解』・

『賀茂翁家集』の出版、浜臣・光房における『県門遺稿』・『県門余稿』の出版、浜臣・与清における『琴後集』・『県門余稿』の出版を鑑みれば、江戸派の面々は出版を手掛けることにより、学派の後継を自任することになつたことがわかる。

もう一点は「出版を請け負う門弟と書肆との関係」であるが、ここで述べられてゐる、春海直門の清水浜臣が真淵門下の歌人の著述を刊行したといふ『県門遺稿』に就て、浜臣が文化八年に執筆した『村田春郷家集』の序文を引く。

あがたるの翁にもまなべる人々、男や女やいとおほかるを、中に世にしられて其名かくれなきもあり。又其名うもれてたれしれりともなきあり。家集はた板にゑりて、残りつたはれるもあり。板にゑらで年月うつりゆくま、にちりうするもあるべし。

おのれはやくより思ひよりて、こゝにかしこにたよりつゝ、うつしおけるを、つき／＼にゑりて世につたへむとす。さはいへ猶しるすぢによしなくて、たづね得ぬぞおほかる。そはいかゞはせむ。今もとめえたるがかぎりをついで、先はじめに此集をゑれるは、わが師の兄人と思ふが故になん。

この序文は、師である春海が文化八年二月に歿してから間もなく書かれた文章である。県居門下の世にそれ程知られてゐない人びとを顕彰するために、その述作を編輯刊行するといふ宣言の下、浜臣は『県門遺稿』を世に問うてゆく。『村田春郷家集』は『県門遺稿』の第一冊目にあたる書物なのであるが、『県門遺稿』とは、真淵門下の歌人の歌集や紀行文を纏めたものである〔表〕参照。なほ、村田春郷は、齡三十といふ若さで逝いた春海の兄である。

浜臣が、文政七年八月に亡くなり、県門歌人の遺稿を刊行するといふ遺志は、養嗣子光房が継承し、『県門余稿』を上梓する⁽⁸⁾。こちらは出版の事情が詳らかでない部分も多く、竹村茂雄、中島広足、村野もと子と直接真淵に教へを受けたといふ訳ではないが、千蔭、春海（またはその弟子筋）に学んだ人物の著作も混ちつてゐる。宣長門の植松有信、茂岳に学んだ国学者歌人千葉葛野、そして三条西家の歌学を継承した、徳川時代前期の歌人水無瀬氏成を、県門と称するにはいさ、か疑問の余地が残るのである⁽⁹⁾。

「織錦門人の分脈」を記した与清、『県門遺稿』を刊行した浜臣、ともに真淵を祖とする江戸派の正統たる春海門を自負するところが大きかつたのであらう。

〔表〕県門遺稿・県門余稿収録作品

県門遺稿（清水浜臣編）		県門余稿（清水光房編）	
第一集 『村田春郷家集』 文化八年序刊	第一集 『歌がたり（村田春海）』 文化五年序刊	第二集 『小野古道家集・荷田在満家歌合・県居家歌合兼題当座歌・村田春道別業集会当座歌』 文化九年序刊	第二集 『折ふし文 上（竹村茂雄）』
第三集 『筑波子集（土岐筑波子）・杉田日記（清水浜臣）』 文化九年序刊	第三集 『折ふし文 下（竹村茂雄）』	第四集 『楳取魚彦集・白猿物語（荷田在満）』 文政四年序刊	第四集 『よの子家集（鶴殿余野子）・水江物語（中島広足）・信濃の家づと（千葉葛野）』 嘉永三年刊
第五集 『椿まうでの記（村田春海）・香取日記（加藤千蔭）』 文化七年序刊	第五集 『水無瀬殿富士百首（水無瀬氏成）・千枝子家集（多田千枝子）』 天保六年序刊		

四

さて、書物を出版するにあたっては、序跋を附すこと、なるのであるが、序文を請ふには師や先輩あるいは著名な人に依頼するといふのが一般的であつた⁽¹⁰⁾。

三河は刈谷の国学者歌人村上忠順は、安政二年に江戸を訪うてをり、その折井上文雄と面会し、文雄が書物の序跋に就て語つたことが紹介されてゐる。

文雄いふ。大かたのふみハ、序跋ありて、いかめしきやうなれ

ど、おのれハさる事をこのまず。よき人にはし書こふハ、ミづからつくれるえせ書をほめた、へさせむ為なれば也。されバ、是ハ事たらはぬやうなれど、かくて有なりといへり。げにきもあらむハひとつの心おきてなれど、猶さしもあらじかし。よしあしを論ひなほされむがためにこふも有べければ、かたくなにもいひがたし。されど此ころの書どもハ、大かたかざりのみにそへたるもののみ多かれバ、なぶらむもなにかハ。(『草分衣日記』¹¹)

自らの誤りを指摘して貰ふべく、師や先輩に序跋を依頼するといふこともあるため、一概には言へないが、「えせ書をほめた、へ」するための「いかめしき」序跋は好まないと、文雄は忠順に語つてゐる。自分の著作には「いかめしき」序跋は好まない、權威に満ちた序跋は必要がないといふことである。実際に文雄の著述(刊本)を閲してみるに、処女作『大井川行幸和歌考証』(文政三年刊)に於てのみ、師である岸本由豆流がその序文を執筆してゐるもの、(跋文は伊庭至清、伝未詳)、その後は、由豆流、千古ともに歿してしまつた為、師に序文を依頼すること叶はず、草野御牧、佐々木弘綱ら門人が序跋を書いてゐる。序跋のない作品も数部存するが、「よき人」(身分の高い人、教養のある人、学才の豊かな人、師)と言へる人物の序跋を見出す事は出来ない。師匠や貴顕の威光を借りずとも、自らの学問、和歌を弘める絶対の自信があるといふ矜持の姿勢が窺へるものである。

文雄と同時代を生きた、香川景樹の門人八田知紀の著作に於ては、

「よき人」にあたる人物の序文、刊本十三点中三作を数へることが出来る。すなはち、『幽郷真語』(天保二年序刊) 平田篤胤序、『桃園雜記』(弘化二年序刊) 岩垣東園序、『都洲集』(嘉永六年刊) 千種有功題歌である。

五

熊本長崎の国学者歌人中島広足は、一柳千古に学んでをり、ために文雄と同門といふことになる。広足は、その著『檀園隨筆』に於て、「一柳大人云」と千古の言説を紹介すること幾編にも及び、師説の伝播に一役買つてゐる。千古はその著述草稿の類を、臨終に際して全て焼いたとされるので、この広足の記述は頗る貴重である。

また、広足は、

本居翁の、近古混雜、ぬえのたとへの説は、いとわるし。詞は、とりなしに、よりに、新古、差別なきものなれば、たゞ其人々の、とりなしの、上手・下手に、よること也。もしこの、ぬえのたとへを、しひていはゞ、今のよの人にして、いにしへまなび、すなるは、やがて、ぬえ人とや、いはまし。猶、くはしくは、久老が論に見ゆれば、いはず。

又、かの新古今を、歌の盛也と、いはれたる論の、あしき事は、春海、はやく、論らひたり。おのれも、歌物がたりにいへれば、こ、にはもらしぬ。すべて、歌のよみかたの論は、賀茂大人の詞、春海が歌語、千蔭翁の詠歌論等に、つきためり。(ぬえ人の論)¹⁴

と、宜長の近体、古体を詠み分けること及び新古今主義を論ひ、真淵、春海、千蔭の説に就くべきである、と説く。千古の師は千蔭であり、千古は千蔭の歌集『うけらが花 二編』の編輯を行ふなど、千蔭門に重要な地位を占める歌人であつた。広足は、千古以外にも長瀬真幸に学んでゐるが、真淵以来の江戸派歌人の流れを継承してゐることを可なり重く見てゐたのではあるまいか。

景樹の歌に対して、江戸派の領袖千蔭、春海はそれ／＼北隣の翁、橋本地蔵磨といふ筆名を用ゐて歌論書『筆のさが』を執筆し、酷評を加へた。享和二年のことである。その一部を引用すると、

（磨云）此歌のいひなしは世に絶えてあるまじき事にて云ハれぬ事なり、新き節を云はんとて、人の云はぬ事を云ひて作出でたれど、心の稚きま、に前しりへをも思ひめぐらさで理通らぬは笑ふべし

（磨云）かばかりに詞くだけて拙き調なるうたをば、すこしうたに口馴れたる人はいひ出でぬものなるを、あまりに調といふもの弁へなきはいかにぞや、（中略）拙き姿なり

（翁云）すべて此うたども皆俗情にて、うたの情にあらず、といつた如くである。内容に關して詳述する余裕はないのだが、これを契機として、江戸派對桂園派といふ対立の構図が浮び上がつてくる。そして、小澤蘆庵の門人までをも巻き込み、筆のさが論争（雅俗論争）が起こり、千蔭、春海が逝いた後も、対立は続き、景樹が文化十五年（文政元年）江戸遊説の為に下向した際、江戸では景樹に対する抵抗が様々な形で行はれた。その徴証となる、景樹の

江戸下向に随従した門人菅沼斐雄の高橋正澄宛書翰（文政元年九月二十二日）⁽¹⁶⁾を引く。

此ごろ大人は兎山方、おのれは浅草元鳥越三筋町東町朝岡伝右衛門方止宿罷在候。（中略）漸此節に至り諸方大動に候。されど浜臣、千古、千本など専門の族は更に寄來らず。香川歌は天下一なれど此説云々、或は貪欲也、或は邪佞也、或は放蕩也など衆口讒して己が上にた、ん事を妬み防ぎ只陰にて罵るのみ。

「千本」は、千蔭の門人正木千幹のこと。江戸派の歌人たちが反景樹の態度を表明してゐたことが如実に語られてゐる。若干時代は下るが、春海門の歌人小林歌城は、景樹の歌集『桂園一枝拾遺』（嘉永三年刊）中から百二十二首を取り上げ『桂園一枝拾遺評』（嘉永六年跋写）⁽¹⁷⁾を著し、

この作者今の世の上手とて人々もてはやすめれど、たゞ才氣あるにまかせて、古人のよみのこせるめづらしきふしを旨とつとめてよみ出でんとするまゝに、一首のしらべに聊意を用ひず、つゞけがら雅俗混乱して、歌のさまを失ひ、てにをは語格をさへ誤れる、あまた見ゆ、さるを上手上手と云ひさわぐは、無下に此道知らぬ人の、大方雷同して云ふにぞあなる、若此よみ口をめでたしと思ひて学ばんとせば、忽大澤中におち入るべし、あはれ世は盲千人めあき千人なるかな、可嘆

と、罵詈譏を浴びせる。しかし、千蔭、春海の学統を継ぐ文雄は、千蔭や春海の師たりし真淵の説に与せず、江戸派の歌人たちが受け容れることの出来なかつた景樹の調の説を支持してゐるのである。

自らの編んだ撰集『摘英集』「附言」に「賀茂の真淵が、歌はうたふものゆゑしらべを専ら心すべし、といへるはひがごと也。香川景樹が、調べは天地のなしのまに／＼にてうたひ出る則なる物ぞ、といへるなむよろしかりける。」と記してゐる。江戸派對桂園派といった学派の対立なぞに、文雄は一切頓着しない。飽く迄も自分の信ずる論を展開するだけなのである。この姿勢は一貫して揺ぐことがない。

六

徳川時代中期以降、『萬葉集』に重きを置いた真淵とその門人たちにより長歌を詠むことが奨励され、長歌復興の流れが顕著になつて来る。この傾向は明治期を迎へても終熄することなく、現在残る長歌作品の殆ど全てが、幕末から維新时期に作られたものとされる⁽¹⁸⁾。文雄もさうした時代の中で長歌を詠み、家集『調鶴集』には、五首の長歌が収録されてゐる。しかし、文雄は長歌に対して否定的であつた。長歌に就て述べた、次のやうな文雄の言がある⁽²⁰⁾。

せまりしれたる古代のはかせら。長歌をいみじきことにいひしより。今も猶遠きみなかうどらは。長歌をよむをたけき事にいふめるこそいとほしけれ。そも／＼長歌は。ことを多くならべいひて。枕詞などくさりつゞくるからに。かへりていとやすき業なるを。耳とほき古語もてつゞくるほどに。物しらぬえせ人ら。おどろきめで、いみじきはかせならでは。長歌はよみいでがたしとのみ思へり。いでや歌の本躰とすべきは。彼出雲八

重垣の大御歌なり。たゞ三十もじあまり一文字に。天地を動かす。鬼神をもあはれと思はするは此本躰にあり。くだ／＼しく詞をくさりつゞけたるは。きく人の心を動かしがたし。たとへば今の世にも。ざえかしこき人は。たゞ一言半句に。よく人を感ぜしむ。おれ者は不用のことを言長くいひつゞけて。中々にきく人の感をおこし得ず。古人の物いひは。大かた詞をなからにいひさして。末はきく人のおしはかりしるべきやうにいへり。そは古き物語書をよくみて。昔人の物いひをしるべきなり。短歌に余情を尊とぶといふも此よしなり。余情あらざれば。きく人の心によくしませず。上古はかなぶみなきによりて。長歌を物したり。かなぶみ出来てよりは。長歌の文字数かぎりあるよりも。文章に長くもみじかくも。心のまゝに自在に其形象をいひつゞくる故。今の京となりては。長歌を人々心とせぬやうになりにけり。されば我は今より長歌はたえてよまじとなんおもふかし。

今日、長歌を詠む人びとを「遠きみなかうど」と蔑み、短歌に比べて長歌を詠むことは、「ことを多くならべいひて。枕詞などくさりつゞくるから」却つて易しいと説く。家集『調鶴集』の刊行が文雄六十八歳の慶応三年、この長歌論はさうした晩年に書かれた文章であらうが、「我は今より長歌はたえてよまじ」と、長歌との絶縁宣言でこの一文を終へるあたり、並々ならぬ覚悟があつたのであらう。千蔭は時代のしからしむる所、長歌を好んで詠んでゐるが、「大江戸」といふ語を家集『うけらが花 初編』(享和二年刊)長歌の

部で三例用ゐてゐる。

……大江戸にのぼりたまひて人皆にしめしたまひぬ……（二五八）

……天の下つどひまつれるお江戸にまゐり来まして……（一五八三）

……大江戸のとはのみかどに政まをしたまひて……（一六一一）

これは、徳川幕府の治世に対する讚歎であると同時に、京都に代つて日本の中心はまぎれもなく江戸なのだ、江戸こそが一番なのだといふ意識のあらはれであつた。事実、千蔭は江戸の様々な土地を讚美した歌を詠んでゐるし、与清門下の幕臣蜂屋光世の編によつて、『大江戸和歌集』（安政七年跋刊）も上梓されてゐる。『大江戸和歌集』には文雄の詠も採られてゐるもの、文雄はこの「大江戸」といふ称呼に就ても批判的な言辞を弄する。

江戸を大江戸といふこと、今はたれもく歌にもよみ、ふみにも書くめれど、よろしからず。そは京師の人のお江戸といふよりや思ひよりけん。いとさとびたり。但し今の世、天の下にたぐひなき大都會の地なれば、大の文字そへていはむもさる事ながら、大やまと、大唐、大宋などこそはいへ、京を大京といへる例もなし。只江戸とこそいふべけれ。（「大江戸」『伊勢の家づと 初編』）

「大江戸」とは田舎染みた表現であり、京都を「大京」といふ例もないゆゑ、ただ江戸とすれば良い、と言ふ。それでは文雄は、江戸

に愛着を持たなかつたのか、といふと、それは否である。『調鶴集』には、「隅田川」「上野」等江戸の名所を詠んだ歌が収録されてゐるし、慶応四年には、門人草野御牧と共に明治新政府を批判し徳川幕府に同情を寄せた歌を詠み、それらを纏め『諷歌新聞』として発刊し、糺問局に拘禁されるに至つた。故郷である江戸を愛する気持ちは誰よりも強いものがあつたはずだ。

七

香川景樹の号としては、桂園・東塙亭・梅月堂がよく知られてゐる。それぐ「ケイエン」「トウウテイ」「バイゲツダウ」と読む。真淵の昇居（あがたゐ）、宣長の鈴屋（すずのや）、千蔭の朮園（うけらぞの）、芳宜園（はぎぞの）、春海の織錦齋（にしごりのや）、琴後翁（ことじりのおきな）、与清の松屋（まつどのや）、浜臣の泊泊舍（さざなみのや）と、多くの国学者が、やまとことばの号を用ゐてゐることから、特殊なものと考へられがちである。文雄もまた、師一柳千古が章堂・予山と号したことに影響を受けてゐるのかも知れないが、景樹同様、柯堂（カダウ）、調鶴（テウカク）と字音の号を使用してゐる。号に関して文雄は、次の如く述べる。

おのが家、柯堂と文字声によべるを、ある人難じていへらく、加茂の翁のあがたゐ、本居翁の鈴のやなど、みやびに皇国詞によばれしを、先生いま殊更に文字声にいはる、はいかに、といへり。おのれ答ふるやう、家の名はもと漢土の風流によれるものなれば、俊恵大徳の歌林苑、後成恩寺殿下の東齋など、いづ

れも字音によればし事、おしはかるべし。あがた居すゞのやの翁たち、たゞかたくなに古へにのみよられて、字音をいみきはれしほどに、み国言葉にと思ひよられしなりけり。そもく弘仁よりこのかた、からぶり世にあまねく、高き人どちの消息、すべて漢文に物せられしからに、自然に常のことゝひも、字音うちまじりし事、空穂源氏の物語を見てしられたり。字音も我、国平常の物いひとなれば、やがて我國の詞にて、これなむ言霊のさきはひなるをや。さればおのれはかの大徳の歌林苑にあそび、殿下の東齋にまゐるを、なほうけぬ人おほからむかし。

〔柯堂陳狀〕〔調鶴集〕

京、白河の自坊を歌林苑と名付けた俊恵、東齋と号した一条兼良といふ先例もあることゆゑ、偏頗な態度で「み国言葉」に固執する必要は無い、字音も既に我が国の言葉となつてをり、用ゐるのに何の躊躇があらうか、といふ論である。

八

文雄の学問は自由である。如何なるものにも束縛されることは無い。これは、文雄が個性重視の歌論を展開してゐたためであらう。「歌に人々本性の口つきありといふは、予はじめて心つきたること」〔ある人にこたへしやう〕「伊勢の家づと 二編」であると、歌に個性の発現を認めた。その歌論は、景樹から示唆を得てゐるのではないだらうか。景樹の言説を門人内山真弓が編んだ『歌学提要』（嘉永三年刊）には、

和歌に、制の詞などいふは、いとも後世の私にて、古へ更になきことなり。さる狭き事にて、いかで思ひを述得べき。我おもひをわがこと葉もていひ出むに、誰にはゞかり、何をさまたげむ。畢竟人にみせむきかせむ為のもの、おもひまどへるゆゑなり。詠歌はたゞ憂悲を慰め、感哀をのべ、心をやるものなり。されば名望利達の念をはなれて、一筋におもひを述べし。其意ふかく、其情切ならむには、鬼神をも感ぜしむべし。況や人間を哀歎せしめざらむや。

と、景樹の和歌観が記される。二条家歌学に於る「制の詞」を批判し、歌を詠むといふことは、「たゞ憂悲を慰め、感哀をのべ、心をやるもの」であり、自らの思ひを自らの言葉で表現すべきなのだといふ主張である。この「自ら」は個性といふ発想が、文雄に受け継がれて行つたのであらう。

歌は折にふれ、ことにつけて、優にも洒落ても詠むべき事いふまでもなし。古人の家集どもをよくく見てさとるべし。撰集のみかつゞさしのぞきて、唯物のあはれのいみじきなど、ひとすぢに思ふは、歌の古意・本義の尊きことを知らぬ後の世の心なり。〔俳諧〕「伊勢の家づと 初編」

「古人の家集」を熟読玩味し、歌は「折にふれ、ことにつけて」上品にも滑稽にも詠むべきであるといふことを理解せよ。撰集だけを眺めて「物のあはれ」に感じ入つたことは、歌の持つ本来の意味を解釈出来てゐないことだから、と厳に誡めてゐる。なほ、「折にふれ、ことにつけて」といふ表現をするに、景樹の詠として

評価の高い「事につき時にふれたる」歌群（「桂園一枝」）が念頭に
あつたのではあるまいか。文雄が、撰集よりも家集を重視してゐた
ことは、清宮秀堅が「常ニ古人ノ家集ヲ愛ラレケリ、ソハ撰集ノ類
ハ、撰者等所好ノ風ノミヲ取り、作者ノ真面目ヲ失ハバ、善惡トモ、
家集ヲ読ムニ如クハナシトナリ」と伝へるとほりて、文雄自身も前
に引いたやうに「歌は折にふれ、ことにつけて、優にも洒落ても詠
むべき事いふまでもなし。古人の家集どもをよく／＼見てさとするべ
し」と言つてをり、それと窺へる。家集を尊んでゐたのは、歌人の
「個性」に重きを置いたからである。「歌に人々本性の口つきありと
いふは、予はじめて心つきたること」である、と断言する文雄の自
信、気概は相当なものである。この、作者個人の性格を自由に歌ふ
べきだ、といふのが、文雄の歌論の根本なのであつた。個性尊重を
説いた文章は、撰集『摘英集』の「附言」が簡にして要を得てゐよ
う。

そも／＼歌のすがたさまざまなり。つよく雄々しく、優になだ
らかに、巧にこまやかに、洒落てくちときなど、すべて各心を
種としていひ出る業なれば、勇ある人はおのづから雄々しく、
才ある人は自然に巧なり。いかなるもされたるも、其人々の本
性によりて、各其顔の同じからぬが如し。

歌は各人の「心を種として言ひ出る業」であるから、心に即してど
のやうに詠んでも良い、そして出来上がった歌には、人の顔が皆違
つてゐるやうに、個性が出てゐるのである、といふことである。

九

はるの野のうかれ心ははてもなしとまれといひし蝶はとまりぬ
（桂園一枝・四七七・事につき時にふれたる）

頭にとおもひかけきや立ちいでて降れ降れ雪といひし昔は（調
鶴集・四六四・雪）

着想の点から言へば、二首共に童謡に典拠を求めた歌である。し
かし、文雄の詠のはうが、童謡をそのまま、一首の中に組み込んであ
る所に、新機軸を打ち出したと言へるのではないか。文雄は「俗
言・平語も、取なしがらにてよく聞ゆるものなり。」（「俗言」）「伊勢
の家づと 初編」と、俗語・口語の使用に関しては比較的寛容で
あり、『調鶴集』にもさうした歌が収められてゐる。文雄は、会津
の歌人相川功垂の著した『ぬさのよるせ』（「桂園一枝」への批評）
に書入れを行ひ、景樹の歌に対して評を下してゐる。そこでの筆法
は、長短いづれをも記述し、実に穩健である。文雄が景樹の和歌、
歌論を意識してゐたことは、ここに明らかであらう。夙に黒岩一
郎氏は、大著『香川景樹の研究』（昭和三十一年、文教書院）に於て、
即ち文雄は春海の孫弟子であり、その限りに於いては少くとも
表面的には反景樹派であつて然るべきであらう。所が彼の歌論
たるや春海の歌論の延長ではなくして、景樹歌論の延長だつた
のである。彼が景樹の調の説をさらに敷衍し、さらに完全化し、
雅情俗情の区別など一切これを設けず徹底的平語の使用を強調
せる等々、蓋し彼こそ景樹歌論の一方における普遍者だつたの

である。景樹歌論の一方の終焉者が景樹門から出でずして、春海系統から出たといふ事は、思へば皮肉な歴史である。然しここにこそ歴史の真実がある。蓋し真に時代に生きたる文学者は、

世の所謂門流系統などは一切これを超越するものだからである。と、景樹の歌論の継承者を文雄と見てゐる。「幕末には各派が自らの主張を固持すると言ふよりも、その考へを尊重しつつも広く交流した時代であつた事を示してゐるのである。」²⁹⁾といふ中澤伸弘氏の見解もあるが、文雄こそ、さうした学統学派に拘泥しない姿勢を貫いた国学者歌人なのである。父祖以来田安家の侍医をつとめ、福岡藩主黒田長知、柳河藩主立花鑑寛、伊勢津藩主藤堂高猷、徳島藩主蜂須賀斉裕、津山藩主松平齐民等各地の大名に歌文を教授してゐるといふ矜持も、自らの学問の根底を支へてゐたのではないだらうか。「田安の殿人 井上文雄」——文雄は、『大井河行幸和歌考証』の「提要」でかう署名してゐる。学問的な權威よりも遙かに大きな田安家、つまり徳川幕府の存在が文雄の胸裡にはあつたのである。

- 註1 山本嘉将『近世和歌史論』（昭和三十三年、文教図書出版。↓修正複製版平成四年、パルトス社）
- 2 小高敏郎校注「戴恩記」（『日本古典文学大系95』昭和三十九年、岩波書店）
- 3 『本居宣長全集 第一巻』（昭和四十三年、筑摩書房）
- 4 拙稿「文雄」（『和歌文学大辞典』平成二十六年、古典ライブラリー）
- 5 佐佐木信綱『近世和歌史』（大正十二年、博文館。なほ、由豆流、千古に学んだとの記述が最初に現れるのは、清宮秀堅『古学小伝』（明治十九年、玉山堂）である。

- 6 中澤伸弘「解題」（『国文学研究資料集 第一巻』平成二十年、クレス出版）
- 7 田中康二「江戸派の出版」（『神戸大学文学部紀要』三十四号、平成十九年三月。↓「江戸派の研究』平成二十二年、汲古書院）
- 8 中澤伸弘「縣門遺稿と縣門餘稿と」（『東洋文化』復刊八十八号、平成十四年三月）
- 9 水無瀬氏成の「富士百首」が収録されたことに就て、田中康二氏は出版書肆の事情が関係してゐると考察されてゐる（前掲7）。
- 10 高木元「他序」（『日本古典籍書誌学辞典』平成十一年、岩波書店）
- 11 「村上忠順集 第二（紀行篇）」（昭和四十九年、村上正雄）
- 12 「伊勢の家づと 初編」（『安政五年刊』、『全二編』（文久二年刊）に限り、文雄より年長である藤尾景秀が序文をものしてゐるが、景秀は文雄の門人である。拙稿「井上文雄著述目録稿」（『成蹊國文』四十八号、平成二十七年三月）参照。
- 13 彌富破摩雄「中島広足」（昭和十九年、厚生閣）
- 14 「樞園隨筆（草稿）」（『中島広足全集 第二篇』昭和八年、大岡山書店。同様の主張は、「すゞのや翁のうた」「すゞのや翁の詞の論」「志を高くすべき事」にも展開されてゐる（吉良史明「広足と宣長……」『後の歌がたり』）に見られる宣長批判の内実——『近世文藝』八十一号、平成十七年一月）。
- 15 井上通泰編「桂園叢書 第一集」（明治二十五年、有斐閣書房）
- 16 井上通泰「菅沼斐雄（承前）」（『めさまし草』五十一号、明治三十四年五月）
- 17 前掲15
- 18 浅田徹「長歌（中古以降）」（『和歌文学大辞典』平成二十六年、古典ライブラリー）。徳川時代に於る長歌の流行に就ては、田中仁「江戸の長歌」（平成二十四年、森話社）に詳細な論考が備はる。
- 19 磯稻綺道秀「長歌軌範」（昭和五年、長歌軌範刊行会）には、『調鶴集』に長歌が六首取められてゐるとある。「橋」といふ題の長歌を『調鶴集』所収としてゐるも未詳。

- 20 井上文雄「長歌論」(中村秋香編『書翰文大成 下巻』明治二十九年、博文館)
- 21 揖斐高「江戸はどう詠まれたか」(『国文学解釈と鑑賞』六十一巻三号、平成八年三月) ↓ 『江戸詩歌論』平成十年、汲古書院)
- 22 「古人の家集」とは、「家の集」(『伊勢の家づと 初編』)に「家の集は、群書類従にをさめたる、貫之・躬恆・忠峯をはじめ能宣・元輔・順・重之・長能・輔親・為伸・俊頼・基俊・行家・為忠・清輔・惠慶・安法・和泉式部・赤染衛門・相模など此外にも名高き人々の集は必ず見るべし」と記してゐる、これらの歌人の家集を指すのであらう。
- 23 窪田空穂「江戸時代名歌評釈」(昭和十年、非凡閣)
- 24 清宮秀堅「古学小伝」(明治十九年、玉山堂)
- 25 「ふれふれこゆき、たんばのこゆき」(『徒然草』百八十一段)
- 26 文雄が景樹の歌論を推し進めた一例として、拙稿「井上文雄の田園詠」(『成蹊國文』三十七号、平成十六年三月)がある。
- 27 たとへば「いづもいふことなりながらこと夏はかばかり堪へずおもひやはせし」(調鶴集・二二六・苦熱)。
- 28 嘉永元年成立。彌富濱雄編『桂園遺稿 下巻』(明治四十年、五重樓)所収。
- 29 前掲8
- 30 拙稿「柯堂門の人びと」(『成蹊國文』四十号、平成十九年三月)
- 31 周防の国学者歌人近藤芳樹は、『寄居歌談 卷三』(弘化元年刊)に於て「田安の殿人井上文雄云」と、文雄の説を紹介してゐる。

〔参考文献〕

- 揖斐高「江戸派の成立」(『和歌文学論集10 和歌の伝統と享受』平成八年、風間書房) ↓ 『江戸詩歌論』平成十年、汲古書院)
- 田中康二「江戸派の血脈」(『神戸大学文学部紀要』三十六号、平成二十一年三月) ↓ 『江戸派の研究』平成二十二年、汲古書院)

〔附記〕

特に断らない限り、引用本文は板本に拠つた。なほ、和歌の引用に就ては、『新編国歌大観』に拠つた。

(すずき・りょう 東京都立第三商業高等学校教諭)